研 究 結 果 報 告 書

研究結果

本研究では、中国語否定表現の誤用を防ぐ新教育方法の開発のために次の研究を行った。

① 中国語における否定表現の誤用事例を整理、類型化した。

② 否定表現の生成プロセス及び中国語否定辞「不」と「没」を使い分ける根拠を特定した。否定表現の生成過程は2段階に分けられ、第１段階で「肯定の予測」が前提されるが、第２段階でこの「肯定の予測」が否定される。この第２段階の「肯定の予測」の否定において、（A）主観的な判断・意志によって否定する場合には「不」が使用され、（B）客観的な事実によって否定する場合には「没」が使用される法則を明確にした。

③ 中国語否定辞「不」と「没」の使用法について、日本語否定辞との対訳が中心の「従来説明法」で多い誤用を避けるため、前記②項の研究に基づいて「新説明法」を試作した。

④ 「新説明法」の有効性の検証と更なる改善のために、「従来説明法」と「新説明法」を使った実験調査を行った。実験では、国立Ｓ大学の初級の履修学生を対象として、「従来説明法」による受講グループ（120人）と、「新説明法」による受講グループ（150人）をつくり、文法テストにより授業効果の比較調査（２回）を行った。調査の結果、学習者の正解率は「従来説明法」の49.8%に対して「新説明法」の59.4%が上回った。中でも、過去の意志、現在の状態、形容詞の否定では、「新説明法」の正解率が「従来説明法」に大差を付けた。

⑤ 「新説明法」は全般的には有効と言えるが、過去の習慣（「以前、彼は煙草をすわなかった」のような文）では両説明法ともに正確率が低く、改善の課題も明確になった。

⑥ 初級、中級のレベルの違いと教育方法の関係を考察するために、2011年１月、公立ＫＳ大学の中級レベル（従来説明法）の学習者80人を対象に同様なテストを実施した。「新説明法」を習得レベルに対応させて精緻化することが次の課題である。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表　(題名・発表者名・会議名・日時・場所等)
1．「『不＋是＋数量表現』と『没＋有数量表現』の意味分析比較」祝東平・王欣、第十回世界華語文教学シンポジューム（台北）、2011年12月25－29日。（申請中）
2.「『不＋性質形容詞』の意味分析」、 王欣・祝東平、 日本中国語学会第61回全国大会（松山大学）、2011年10月29－30日。（申請中）

論文　(題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)
1．「中日否定極性副詞“并”及び“決して”の比較」、王欣、 島根大学外国語教育センタージャーナル (6)、 2011年3月、19-38。

2．「否定とコミュニケーション」、祝東平・王欣、社会科学戦線。（投稿中）

書籍　(題名・著者名・出版社・発行時期等)